

On the Properties of Activo-Passive Constructions

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/42527

能動受動文の特性について

大塚 巖・長谷 三香*

On the Properties of Activo-Passive Constructions

Iwao OTSUKA and Mika HASE*

My concern here is to consider and explicate syntactic properties and semantic characteristics of activo-passive constructions (hereafter, APs), comparing with normal passives. Unlike passives, APs describe the do-ability of a specified action which is caused by the properties of the patient and which can be, or is performed, by an implicit agent, that is, by people or anybody. In addition to this, the activo-passive verbs describe the properties of a patient, rather than those of an agent. We may, therefore, reasonably conclude that in APs, the properties of the patient are in focus.

はじめに

本稿で取り扱うタイプの文は、以下のようなものである。

This book sells well.

この文は、Jespersen(1927) が activo-passive (以後、能動受動文とする。)と呼ぶもので、形式的には能動態であるけれども、受身的意味を表すというものである。

この能動受動文に対する関心は、受身的な意味を表すのに、どうして能動形が用いられるのかという点である。

それを明らかにするために、本稿では、①表現内容の点から、能動受動文形成の、受動態とは異なる特性とは何か、②表現内容の特性との関連から、能動受動文に使用可能な動詞と使用不可能な動詞が各々にもつ意味的特徴とは何か、を考察してみたいと思う。

I 能動受動文の特性

能動受動文の表現内容の特性については、受動態と比較しながら、この文がどのような特徴をもっているのかに着目しながら、考察を進めていくことにする。

a. 主語の位置に生じる名詞句

主語の位置にある名詞句は、(1b)におけるように、動作主 (agent) ではなく、動詞の主題 (theme) である。(cf. Keyser & Roeper 1984: 381)

(1) a. Someone bribed the bureaucrats.

b. Bureaucrats bribe easily.

また、主語の位置に移動された名詞句は、主格を受け、動詞は、その名詞句に対格を割り当てない。このことは、主格付与される受動態形成と類似している。(cf. *Op.cit.* p.401)

(2) a. Them he bribed *t*.

b. They bribe easily.

- c. *Them bribe *t* easily.

さらに、主語は、動詞の受動者である。このことは、以下の文の受動の不定詞節が容認可能であることから示される。(cf. Fellbaum 1986: 2)

- (3)a. The dog food cuts like meat to be served conveniently to your pet.
 b. *The dog food cuts like meat to serve it conveniently to your pet.

b. 動作主

動作主は、潜在的に存在していると考えられるので、(4)に見られるように、その動作主の存在を排除してしまうような語句とは共起できない。(cf. Keyser & Roeper 1984:404-405)

- (4) *Bureaucrats bribe easily all by themselves.

また、潜在的に存在すると考えられる動作主は、決して表層に現れない。よって、潜在的な動作主をby前置詞句などによって特定できない。(cf. *Op.cit.* p.406)

- (5) *Bureaucrats bribed easily by manager.

ところが一方、受動態は、受身のby前置詞句によって動作主は任意に表される。(cf. *Ibid.*)

- (6)a. John was hit.
 b. John was hit by Bill.

以上、主語の位置に生じる名詞句と、動作主という観点から、能動受動文の統語的特徴を、受動態と比較して見てきたわけであるが、ここまでのことまとめると次のようになる。すなわち、受動態との類似点は、この主語に生ずる

名詞句が、動詞の受動者であり、また、その名詞句は、最初は統語的に他動詞の目的語であったものが、主語の位置に移動され、主格付与された主題であること、また、受動態との相違点は、この文の動作主が、受動態のように、統語的な形態はとらない、つまり、表層上には現れないけれども、潜在的に存在しているということである。

ということは、受動態とは異なった、能動受動文の表現内容について知るためにには、この潜在的な動作主について、意味機能の面から考察すればよいことになる。したがって、次に、この潜在的な動作主について、主題・格関係から考察することにする。

潜在的な動作主名詞句は、動作主の役割において制限される。つまり、動作主名詞句は、(格関係において) 受容者(recipient) や、受益者(beneficiary) であったり、(主題関係において) 着点(goal) ではあり得ない。(cf. Fellbaum 1986:18)

- (7)a. *Flowers receive with pleasure.
 b. *Certain titles inherit automatically in France.

言い換えるれば、能動受動文の深層構造においては、主語の位置に動作主をもたなければならない。すなわち、深層構造における主語は、与格や経験者ではあり得ない。(cf. *Ibid.*)

- (8)a. *White Cadillacs impress easily.
 b. *Garlic tastes easily.

つまり、深層構造における主語の位置にある名詞句は、動作主の役割を果たすということである。しかも、統語的特徴において見たように、主語は、意味的に動詞の受動者である。ということは、これらのことを考え合わせれば、能動受動文の主語の位置には、表層構造では、受動者が存在し、深層構造では、動作主が存在して

いることになる。まさに、この点が、意味機能の面で、受動態とは異なった、能動受動文の特性であると言えよう。

C. 表現内容

では、次に、そのような特性をもつ能動受動文は、どのような表現内容を表すのであろうか。以下では、このことについて考察する。

能動受動文は、ある特定の出来事ではなくて、一般的に真実であると考えられる命題を述べる、総称的な陳述である。(cf. Keyser & Roeper 1984:384, O'Grady 1980 a:59-60)

- (9) a. Bureaucrats bribe easily.
- b. ?Yesterday, the mayor bribed easily, according to the newspaper.
- (10) a. The clothes iron well.
- b. ?The clothes are ironing well at the moment.

しかし、このように総称的に解釈されるのは、能動受動文の行為自体ではない。というのは、表現される行為の単一の、あるいは、繰り返される実行を言及する以下の文は、容認可能であるからである。(cf. Fellbaum 1986:4)

- (11) a. Her latest novel is selling like hotcakes.
- b. The truck is handling smoothly.
- c. The steaks you bought yesterday cut like butter.
- d. The paint we were persuaded to buy sprayed on evenly.

これらの文は、むしろ可能性のある、どんな動作主でも、指示される結果や様態で、その行為をすることができる、あるいは、することができたという表現である。

要するに、総称的に解釈されるのは、行為で

はなく、主語の位置にある潜在的な動作主(Fagan(1988) の言葉で言えば、“根底にある主語”: underlying subject)である。

総称的であるということは、言い換えれば、深層構造の主語の位置にある動作主は、明確な、あるいは、限定されたものではないということである。よって、そのような動作主は、peopleや(any) oneとして解釈されなければならない。しかしながら、そのような主語を単にもつ文をつくることは、能動受動文の意味に相当する適切な文とは必ずしもならない。(Fellbaum 1986: 19)

- (12) a. This car handles stiffly.
- b. ??(Any)one handles this car stiffly.
- c. ??People, in general, handle this car stiffly.
- d. ??This car is handled stiffly by people, in general.

以下のような文が示すように、むしろ、そのような動作主による行為の遂行可能性(dobility)を表す。(cf. *Op. cit.* p.2)

- (13) a. People, in general, can handle this car smoothly.
- b. One can handle this car smoothly.
- c. This car can be handled smoothly by people, in general.

以上、能動受動文では、総称的に解釈され、表層上には表れない、潜在的な(つまり、深層構造における)動作主主語が、指示される結果や状態で、行為することができるという遂行可能性が表現されると言える。

ただし、そのような総称性は、既に見たように、潜在的な動作主にかかるのであって、(14 a)の例文が示すように、表層上に現れている主語(受動者)に関しては、必ずしも総称的でなく

てもよい。(cf. Fagan 1988:196)

(14) a. This book reads easily.

b. A cow eats hay.

また, Fellbaum(1986)によれば, 概略, 能動受動文では, その行為の(好)結果は, 主として, 受動者の特性によっている, と言う。

これらのことから, 能動受動文は, 表層主語である受動者が, 総称的であろうとなかろうと, とにかく受動者の特性を表す点に焦点が合わされた文であると言えよう。また, このことは, van Oosten(1977:460)の以下の文からも例証される。

(15) The clothes wash with no trouble because…

a. …they are machine-washable.

b. *…I have lots of time.

(16) It's no trouble to wash the clothes because…

a. …they are machine-washable.

b. …I have lots of time.

(15)と(16)を比較すればわかるように, 従属節の容認可能性の違いは, 主節の主語が何であるかに依っている。これは, 受動者が表層上の主語にされる能動受動文では, 受動者の特性が表現されることを示すものである。

以上, ここまで考察してきたことを全てまとめると次のようにになる。能動受動文では, 総称的に解釈される潜在的な動作主が, 受動者の特性に起因する行為をすることができる, という遂行可能性とその行為の結果や状態が表現されるということになる。しかも, このような表現内容が, 一般的に真実であるという命題であることから, 結局, この文は, どんな人(誰)でも, 受動者(対象)の特性に起因する行為をすることができるのだ, という遂行可能性, ならびに, その行為の結果や状態が, 誰によっても,

一般的に真だと考えられている, ということを表す文だと考えられる。すなわち, 受動者の特性が, 中心的に述べられた文であると言えよう。さらに言えば, 潜在的な動作主の総称性が, この受動者の特性を中心的に述べることに貢献しているのである。つまり, この点に, 単なる, 受動行為を表現する受動態とは異なった, 能動受動文の表現内容の特性が, 認められるのである。したがって, 当然のこととして, 能動受動文に生じ得る, 主語や動詞や副詞(類)に関する現象は, その機能や役割において, この文の表現内容における特性に起因する。以下に, これらの現象について, 各々示すことにする。

＜主語に生じる現象＞

以下の例が示すように, 主語の位置には, どんな名詞句でも生じ得るというわけではない。

(17) a. This piano plays easily.

b. *This sonata plays easily.

(Fellbaum 1986:13)

主語の選択においては, 受動者の特性と動作主の総称性を満たすものが, 主語に選ばれるのである。つまり, この条件を満たせば, 全く稀にではあるが, 手段を示すものや, 位置を示すものが, 主語として生じ得るということになる。(cf. Yoshimura 1990:497)

(18) a. Pine trees cut well.

b. This knife cuts well.

(19) a. This table polishes well.

b. This cream polishes well.

(20) a. This lake fishes well.

さらに, 人間の受動者も, 主語として生じ得る。Yoshimura(1990)によれば, この条件としては, 話者が, 操作すべき目的語として, 人間の受動者を記述する意図をもつことであり, このことは, 人間の受動者が, 明確な個人ではなく

くて、総称的な類として記述されることからも証明され得る、と言う。この条件も結局は、受動者の特性や動作主の総称性に起因すると考えられる。

- (21)a. I don't fool/discourage/shock/scare so easily.

- b. Don't say such things to him. He discourages very easily.

(van Oosten 1977:467)

- (22)a. A baby washes more easily than an armadillo.

- b. A person who isn't self-conscious photographs well.

- c. Honest men trust easier than thieves. (Yoshimura 1990:505)

<動詞に生じる現象>

かなり多くの動詞が、能動受動文には、生じ得ない。Fellbaum(1986)によれば、以下の文が示すように、明確な精神の特性や（一時の）気分をもつ動作主を必要とする動詞は、能動受動文から排除されるという。というのは、このような動詞の意味的特徴は、総称的に解釈される潜在的な動作主によって表現され得ないからである。

- (23)a. *Crickets see on summer evenings.
b. *His mathematical papers explain easily. (Fellbaum 1986:15-16)

この現象は、言い換えれば、能動受動文における動詞の使用可能性を決めるのは、この動詞の意味的特徴が、能動受動文の表現内容の特性に起因するかどうかに依るということを示唆してくれる。

<副詞（類）に関する現象>

ほとんどの能動受動文では、副詞（類）が動詞のあとに生じる。というのは、副詞（類）は、

能動受動文で最も重要な情報を伝えるからである。もし、副詞（類）がないなら、ほとんどの能動受動文は、容認不可能である。(cf. Fellbaum 1986:7)

- (24)a. *Washington's letters don't read.
b. Washington's letters don't read easily.

- (25)a. *This salami slices.

- b. This salami slices easily.

では、副詞（類）が、この文において、どんな重要な情報を伝えているのであろうか。以下に、このことについて示す。

(26)の文が示すように、副詞（類）の選択を支配するのは、動作主よりも、むしろ受動者の特性である。(cf. Fellbaum 1986:9-10)

- (26)a. *This little flashlight plugs in expertly.
b. *Red wine spots wash out carefully.
c. *Cotton irons cautiously.

Fellbaum(1985)による副詞の分類に依拠すれば、(26)のタイプの副詞（類）は、様態の副詞(manner adverbs)と呼ばれているものである。この副詞（類）は、総称的に解釈される潜在的な動作主の特質ではなく、特定的な動作主の特質を表現するので、(26)の文は容認不可能なものとなる。

さらに、副詞（類）が、受動者の特性を表現していることは、能動受動文に、許される副詞の種類を見ることによって、より明確に説明される。以下の文が示すように、容認可能な副詞（類）は、その特性が、動作主ではなくて、受動者に起因する性質((27)を参照)や、また、行為中あるいは、行為の結果、受動者に起こる状態を記述したり修飾する。(cf. Fellbaum 1985)

- (27) These chairs fold up $\left\{ \begin{array}{l} \text{easily.} \\ \text{quickly.} \\ \text{in a jiffy.} \end{array} \right\}$
- (28)a. This dog food cuts and chews like meat.
 b. Her novels sell like hotcakes.
 c. This light plugs into any household outlet.
 d. Polyester cleans faster than cotton.
 e. This umbrella folds up in the pocket. (Fellbaum 1985:24, 26)

Fellbaum(1985)によれば、(27)のタイプの副詞（類）は、容易さの副詞(facility adverbs)と呼ばれ、(28)のタイプの副詞（類）は、出来事の副詞(event adverbs)と呼ばれるもので、これらの副詞（類）が、能動受動文において使用可能なものである。

結局、副詞（類）は、能動受動文において、受動者に対する行為の結果や状態を表現する働きをしているのであり、これが、先にも述べた、もし、副詞（類）がないなら、ほとんどの能動受動文が容認不可能となることの理由である。

以上、このように、副詞の機能において生ずる現象もまた、表現内容の特性に起因していることが示された。

II 動詞の意味的特徴

能動受動文に生じ得る動詞と、生じ得ない動詞とを分かつ原因是、その動詞の意味的特徴が、能動受動文の特性に適合するか否かによるということである。

では、いったい、どんな意味的特徴をもった動詞が、使用可能で、あるいはまた、使用不可能であるのか。この疑問を解くために、この能動受動文に使用可能な動詞と使用不可能な動詞において見られる意味的特徴について考察し、これらの特徴を、能動受動文の特性との関連か

ら見ることにする。

1. 使用可能な動詞の意味的特徴

以下では、使用可能な動詞の意味的特徴を考察する。考察するにあたっては、動詞の類似した特徴ごとに整理して示す。

1. 変化を表す動詞

この中には、位置の変化(cf. Yoshimura 1990)や、化学的・生物学的変化(cf. Poldauf 1969)の他に、物理的変化や心理学的変化も認められる。

<位置の変化を表す動詞>

- (29)a. Granite lifts with difficulty.
 b. This sign dismantled easily.
 c. The baggage transfers efficiently.
 (Yoshimura 1990:502)

<化学的・生物学的变化を表す動詞>

- (30)a. Sugar dissolves in salt water.
 b. Gold does not corrode.
 c. Their flesh assimilates more finely
 (Poldauf 1969:29)

<物理的変化を表す動詞>

この物理的変化の中には、量的な変化、状態の変化、色の変化が含まれるように思われる。以下に、各々について、例を示す。

○量的な変化を表す動詞

- (31)a. Constance and Samuel had half of all Aunt Harriet's money and half of Mrs. Baines's; the other half was accumulating for a hypothetical Sophia, Mr. Critchlow being trus-

tee.

- b. ...and its resources are diminishing in a struggle for markets.
- c. Her eyes were filling with tears.
- d. Wealth was increasing.

(Buyssens 1979:755-756)

○状態の変化を表す動詞

- (32)a. The arteries were hardening.
 b. The tale of her thefts lengthening hour by hour.
 c. The clenched fingers were loosening
 d. The novitiate was ending.
 e. It(The Renaissance) was fast withering away under the hands of Spaniards and Jesuits.

(*Ibid* .:755-757)

○色の変化を表す動詞

- (33)a. The stage is rapidly darkening.
 b. All was still, discreetly mellowed in the late sunlight, which was already yellowing as the sun declined. (*Ibid* .:756,757)

以上、物理的変化を表す動詞があることを観察した。

<心理的状態の変化を表す動詞>

感情の使役的な動詞は、人間の主語と共に生じれば、全て可能である。(cf. Yoshimura 1990)

- (34)a. Don't say such things to him. He discourages very easily.

(Yoshimura 1990:503)

- b. John astonishes easily. (*Ibid* .:505)
- c. Mary seduces easily. (*Ibid* .:505)

これらの動詞は、心理的な状態の変化を表すものとして、特徴づけられる。

以上、変化を表すものとして特徴づけられる動詞を見た。

2. 技術的な操作を表す動詞

この中には、道具を介して遂行されるもの(cf. Yoshimura 1990 : Poldauf 1969) の他に、物体に直接触れることによって遂行される、技術的な操作を表すもの(cf. Yoshimura 1990) も認められる。

<道具を介して遂行される操作を表す動詞>

- (35)a. Black-and-white film develops easily.
 b. The door won't lock.

- c. Silver polishes easily with this special cloth. (Yoshimura 1990:502)

- (36)a. A jacket that buttons up close to the neck.
 b. Curtain that draw in front of the coach.
 c. The head screw off at the middle of the neck. (Poldauf 1969:28)

<直接接触の操作を表す動詞>

- (37)a. These toys assemble rapidly.
 b. Cheap basketballs dribble poorly.
 c. Cotton yarn rolls easily.

(Yoshimura 1990:502)

以上、技術的操作として特徴づけられる動詞を見た。

3. 対象に及ぼす作用を表す動詞

作用の点から言えば、内的作用と外的作用に二分されるように思われる。さらに、内的作用には、感覚器官に対する作用や、知的作用が認められる。以下に、各々について、例を示す。

<内的作用を表す動詞>

○感覚器官に対する作用を表す動詞

感覚的に認識される特性を言及する動詞がある。(cf. Poldauf 1969)

- (38)a. The wine drank · too flat.
- b. They eat with a savour like marrow.
- c. The cigar smokes delicious.

(Poldauf 1969:31)

○知的作用を表す動詞

- (39)a. Russian novels read easily.
(Fellbaum 1985:24)
- b. The lines rhyme. (Hatcher 1943:9)
- c. The book translate easily.
(Keyser & Roeper 1984:383)

<外的作用を表す動詞>

次のような動詞は、直接、間接を問わず、対象物(人を含む。)に対する外的作用を表すようと思われる。

- (40)a. The door opens easily.
- b. The bottle breaks easily.
(Keyser & Roeper 1984:383)
- c. The baby fed easily. (Endo 1986: 115)
- d. These weeds pull out easily.
(Fellbaum 1986:17)

以上、対象に及ぼす作用を表す動詞があることを観察した。

ここまで、使用可能な動詞について、その意味的特徴を考察してきたわけであるが、これらの特徴から、使用可能な動詞に共通した意味的特徴は、その動詞で言及される行為の過程や状態が、視覚やその他の感覚でとらえられる具体的で、なおかつ、物理的な活動を表すものである、と言えるのではないかと思われる。

2. 使用不可能な動詞の意味的特徴

Fellbaum(1986)が指摘するように、知覚や、理解や、疑惑を表す動詞は、一般に使用不可能である。

1. 知覚を表す動詞

- (41)*Crickets { see } on summer evenings.
- { watch }
- { hear }

(Fellbaum 1986:15)

2. 理解・疑惑を表す動詞

- (42)*His mathematical papers { explain
easily. }
 { understand
grasp
learn
comprehend
question
doubt
refute
(dis)prove
believe }

(Fellbaum 1986:15)

Yoshimura(1990)の報告によれば、欲望を表す動詞も使用不可能である。

3. 欲望を表す動詞

- (43)*Beer wants frequently.
(Yoshimura 1990:501)

これらの動詞に加えて、認識や感情を表す動詞も使用不可能である。

4. 認識を表す動詞

- (44) a. *The answer realizes easily.
(O'Grady 1980 a:64)
- b. *The answer knows easily.
- c. *The arguments assume easily.
(Keyser & Roeper 1984:383)
- d. *Mary considers smart easily.
(Endo 1986:115)

5. 感情的な状態を表す動詞

- (45) a. *A new car prides easily.
- b. *Snakes fears easily.
(O'Grady 1980 a:64)
- c. *These people like easily.
(Palmer 1974:93)

以上より、使用不可能な動詞に共通する特徴は、Keyser & Roeper(1984:383)の言葉を借りれば、抽象的な心的活動 (abstract mental activity) を表すものであると言える。また、動詞の意味的特徴と、特性との関連について、表現内容の点から考えると次のようになる。つまり、使用不可能な動詞に比して、使用可能な動詞の意味的特徴は、能動受動文の表現内容であるところの、「受動者特性」や、「総称的な動作主によって、受動者に対してなされる行為の遂行可能性」に、適合するものであると言えよう。すなわち、使用可能な動詞は、能動受動文の特性に適合しているのである。

最後に、ここまで考察してきた、使用可能な動詞と使用不可能な動詞の意味的特徴を、それぞれ以下に示す。

(A) 使用可能な動詞は、具体的・物理的活動を

表す。

1. 変化
 - ・位置の変化
 - ・化学的・生物学的変化
 - ・物理的変化 (量、色、状態)
 - ・心理的状態の変化
2. 技術的操作・道具を介した操作
 - ・直接接触の操作
3. 作用
 - ・内的作用 (感覚的、知的)
 - ・外的作

(B) 使用不可能な動詞は、抽象的・心的活動を表す。

1. 知覚
2. 理解・疑惑
3. 欲望
4. 認識
5. 感情的な状態

III 結び

以上の考察によって、能動受動文の特性を、次のようにまとめることができる。能動受動文は、受動者の特性を中心的に述べるために、どんな人にとっても、遂行可能であると思われる行為、ならびに、その行為の結果や状態を一般的に表現する。能動受動文に使用不可能な動詞は、抽象的で心的な活動を表すものとして特徴づけられる一方、使用可能な動詞は、具体的で物理的な活動を表すものとして特徴づけられる。能動受動文においては、動作主が決して表現されないことが、受動者の特性を中心的に述べることに貢献していると思われる。

参考文献

- BARBER, E. J. W. 1975. Voice-beyond the passive. Proceeding of the First Annual Meeting of Berkeley Linguistic Society. 16-24.

- BUYSSENS, E. 1979. The active voice with passive meaning in modern English. *English Studies* 60:6. 745-761.
- ENDO, Y. 1986. A constraint on English activo-passives. *Tsukuba English Studies* 5. University of Tsukuba. 107-121.
- ERADES, P. A. 1950. Points of modern English syntax. *English Studies* 31. 153-157.
- FAGAN, S. M. B. 1988. The English middle. *English Inquiry* 19.2, 181-203.
- FELLBAUM, C. 1985. Adverbs in agentless actives and passives. *Chicago Linguistic Society* 21.2, 21-31.
- 1986. On the middle construction in English. *Indiana University Linguistic Society* 1-24.
- GRADY, M. 1965. The medio-passive voice in modern English. *Word* 21. 270-272.
- HATCHER, G. 1943. Mr. Haward amuses easy. *Modern Language Notes* 58.8-17.
- JESPERSEN, O. 1927. A Modern English Grammar on Historical Principles. London : Allen & Unwin. part 3
- KEYSER, S., and T. ROEPER. 1984. On the middle and ergative constructions in English. *Linguistic Inquiry* 15. 381-416.
- O'GRADY, W. D. 1980 a. The derived intransitive construction in English. *Lingua* 52. 57-72
- PALMER, F. R. 1974. The English Verb. Longman.
- POLDAUF, I. 1969. The so-called medio-passive in English. *Acta Universitatis Carolinae Prague, Studies in English* 13. 15-34.
- VAN OOSTEN, J. 1977. Subjects and agenthood in English. *Chicago Linguistic Society* 13. 459-471.
- VENDLER, Z. 1984. Adverbs of action. In *Papers from the Parasession on Lexical Semantics*: *Chicago Linguistic Society*. 297-307
- YOSHIMURA, K. 1990. A study of verbs in the activo-passive constructions. 『ことばの饗宴』くろしお出版. 495-512.